

やまどり

俳人協会
群馬県支部
☆
発行所
高崎市飯塚町737
TEL.027-361-0870



令和七年度俳人協会

群馬県支部俳句大会成績発表

(特選・県支部長賞)

朝霞見知らぬ町にあるやうな

星野うらら

(特選・上毛新聞社賞)

銀婚や桜しべ降る古都の旅

永山比沙子

(入選)

まんざらや除雪車の雪ふりかぶり

矢野間稲霧

あめひとつあけて遍路の連れとなる

濱名 博光

朝寝してかむる人のなかりけり

黛 正登志

弁当の仕上げにひとつミニトマト

大井 節子

春耕の前に後つに雀群れ

岩崎 爰江

若葉風キリンの顔のクレーン車

笠井 智郁

三桎や数に律儀の枝と花

深谷 信郎

どの道も翠舞ふ五月軽井沢

斎藤 博文

【選考】

無記名の作品を選考7名(原田清正・宮崎全夏子・武藤洋一・大塚洋一・吉藤淳子・木下涼薫・吉澤草子)が各々10句選句した。高得点の中から特選・入選を決め、選考7名は選考から外した。

令和七年度群馬県支部会員

石井昭子 市村二江 今井妙 岩崎爰江 馬上絹代
大井節子 大澤文子 大谷孝子 大塚洋一 荻原多香子
荻原富江 荻原葉月 柿沼あい子 笠井智郁 加藤周子
金井きくよ 金子笑子 権沢紀久子 川崎りつ子
北原東洋男 北村由美子 木下涼薫 木村恵里子
小笠とこ子 小林和子 斎藤博文 酒井富子 佐々木美恵子
佐藤美智子 椎名和代 品川恵子 篠原しづか
須賀静子 須川眞理子 須川良子 杉木輝夫 関定由
善養寺玲子 高橋栄子 高橋初江 高丸正顕 高嶺京子
角田はる子 永垣菊江 中島外男 中嶋孝子 中村明子
永山比沙子 野中章光 濱名博光 林恵美子
原光生 原田清正 深谷信郎 深谷征子 福田昌子
星照子 星野うらら 星野よう子 本田巖真下章子
増田志津子 町田洋子 松本睦子 黛正登志 宮崎全夏子
宮下昌子 武藤すみ江 武藤洋一 村上郁子
弥城節子 柳井康造 矢野間稲霧 矢野間妙子
山谷三千江 吉井たぐみ 吉澤草子 吉沢美智子
吉田八千代 吉藤青楊 吉藤淳子

(6月30日現在)

秋の吟行会参加者募集

昨年に続き吟行会を開催いたします。日本のポンペイと呼ばれる嬭奈村鎌原や、NHK大河ドラマに決まった小栗上野介の菩提寺、旧倉敷村の東善寺など、皆様のついでに参加ください。

日時・令和七年十一月十八日(日)午前九時出発
午後五時半解散予定

集合・JR新前橋駅前ロータリー
(中型バス一台(乗車))

吟行先・鎌原観音堂(嬭奈村)
・北軽井沢駅舎(旧草軽電鉄)

・東善寺(小栗公墓所)

会費・5,000円(弁当代を含む)

投句・バス車内の投句箱に吟行句3句を投句

選・支部長選と全句を「やまどり」次号に掲載

申込み締切り・七月三十一日

申込み方法・現金書留にて会費を添えて

申込み先・大塚洋二

〒371-0056

前橋市青柳町9152

(携帯)090-2168-4504

11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
四姉妹枝垂桜を背に睦む	病む性を生きて古稀なり万愚節	枝に刺す蜜柑に禽の小競り合ひ	まんさくや除雪車の雪ふりかぶり	若駒に佳き名付けしは少女なる	スイートピーいつも誰かに見つめられ	春の雪傘の重たき散歩かな	消防車遠くに野焼始まりぬ	山間のかたかこ楚々と風に揺れ	手水舎に花を浮かべて梅雨の寺	脱ぎしもの腰に巻きたる薄暑かな
高橋 栄子	矢野間稲霧	関 定由	木下 涼薫	林 恵美子	福田 昌子	北原東洋男	吉井たくみ	柳井 恵康	今井 妙	本田 巖
22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12
隣家もその隣家も柿若葉	八重桜農家の庭の夫婦句碑	春風の堂や十六羅漢座す	弁当の仕上げにひとつミニトマト	ペランダの風に翻弄こいのぼり	緋牡丹や客を待たずに開ききる	碓氷川さらさら流れ五月来る	母の日やふと思ひ出す母の顔	朝寝してとがむる人のなかりけり	凍てる池人声に鯉寄り来たる	乾鮭を吊る縄どれも縦結び
佐藤美智子	大井 節子	武藤ふみ江	高丸 正顕	町田 洋子	吉澤 章子	濱名 博光	篠原しづか	萩原 富江	金井きくよ	金井きくよ
33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23
緑陰に夫車椅子試乗せり	団子虫探すシャベルや立夏の子	若葉風キリンの顔のクレール車	千代八千代乾御門の八重桜	飛花落花養蚕農家の総櫓	行く春やロザリオのせし木の棺	陽炎へるふと父の貌母のこゑ	顔揃へ寄り来る草魚湖五月	ブロッコリー積むごと青き榛名富士	開かれしホームの窓や初燕	柿若葉雨をこぼして鳩の翔つ
笠井 智郁	原 光生	大谷 孝子	岩崎 妥江	大塚 洋二	永塩 菊江	石井 昭子	吉藤 青楊	須賀 静子	須川 良子	馬上 絹代
登り来し山に広がる鳥兜	ゆづりあふ木道の下の水芭蕉	落人の村まで続く雪灯籠	紫木蓮の花の鳥かご鴨こもる	黄金週釣りし魚の銀ひかり	思惟仏に水のめぐれり九輪草	里山の緑燦爛立夏なり	遠き日の夢蘇る白牡丹	黄金週旅好きの夫思はるる	涅槃図の迦陵頻伽の顔憂ひ	白鳥の凜と行き交ふ星眠忘
松明の登る登音修二会かな	風穴は蚕種貯蔵庫風五月	パラグライダー関東平野春つらら	日の出つや湖にほひたつ山桜	轉りや谷戸集落にふりそそぎ	山峡の古刹に凜と山桜	薬草と知るや愛しき滑覧	蓬萌ゆる緑の葉師ほほめぬば	飛燕鳴く港見おろす天主堂	ハンカチの木よこれの目立つ花落とす	開かれしホームの窓や初燕

44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34
シャボン玉吊橋ゆらり揺らぎけり	音がたてて八十八夜の堰の水 がらがらの電車の速さ柚子の花 天平の瓦に文字やあたたかし	老鴛や小町の井戸を汲みをれば ごきぶりを追ひて厨に転びけり	薫風に足どり弾む赤い靴 孫からの便りうれしや春光る	寒月が照らし出したる病室を 朝どりの太きアスパラ春の味	花散りて雨にきらめく雪柳 都忘れ咲きしよ会へぬ人思ふ	老の身のあちこち軋む春寒し 春遅々と武尊の山の悠然と	花あやめ脇に侍らす小町井戸 朝練へ自転車急ぐ麦の波	突然に寝言声高春の夢 天麴羅かと覗く厨の蔭の臺	傾きて雨後に紅くひめさゆり 日の暮れの鴝の高音や菜園に	大寺の豊息づく五月かな 川芎の花より白く滝し吹く
矢野間妙子	中嶋 孝子	永山比沙子	宮下 昌子	佐々木美恵子	小林 和子	星野よう子	弥城 節子	山谷三千江	木村恵里子	高嶺 京子
55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45
泰山木の病葉かさと音立てて	夏満月なれどおぼろの影を曳き 軋らの朝の筋トレ合歡の花	濃山吹社に響く祝詞かな 夕闇の田圃此処よと蛙鳴く	麦秋や日に三便の路線バス 村の恋すべて承知の青葉木菟	満開の花に包まれ手ぶらかな 風薫る新人生は一系列に	白砂のさらさらさらと風薫る 幼子の指差す先に蝸牛	日を弾く仏足石や若楓 いくたびも浅き眠りを春の闇	骨董市の古書売る女将春裕 篋の足にやさしき春落葉	神棚へ榊の若葉供へけり 建築の木材薫る梅雨晴間	藤の花波を起こして揺れにけり 北窓に耳をすませば初音かな	花は葉に泣き虫の子が小学生 花は葉に玩具のよふなトラクター
深谷 征子	柿沼あい子	星野うらら	武藤 洋一	吉田八千代	高橋 初江	真下 章子	吉藤 淳子	増田志津子	須川眞理子	加藤 周子
64	63	62	61	60	59	58	57	56		
蘆園に皇室の名の蘆微咲きて 宙を彷徨う尺蠖虫や目の前に	うららかや仔牛寄り添ふ藁ロール 咲き満ちしなんじやもんじやの風白き	煙立つ卯月ぐもりの瓦町 どの道も繁舞ふ五月軽井沢	鳥の子反哺の孝を忘れめや 画眉鳥の恋歌つづく蘆微の園	水はせを婆沙と木道を遮れり 水上は母のふるさと出水川	何が無し桜前線通り過ぐ 田植済み棚田の風よ無人駅	新緑や東屋の句座盛り上がり 舞めきて歯菜の萌ゆるや木暗がり	旅人の母国語交わす湯宿かな 花愛でて花詠む人の多きこと	仲良しや風車風船チューリップ 三極や数に律儀の枝と花		
松本 睦子	大澤 文子	斎藤 博文	原田 清正	宮崎至夏子	吉沢美智子	星 照子	品川 恵子	深谷 信郎		

第64回全国俳句大会(一般部)のご案内

俳人協会員以外の一般の方も投句・大会出席出来ます。

▽募集

二句一組(未発表作品。所定の用紙又はコピーしたものを使用)。何組でも可。

俳人協会ホームページからダウンロードできます。

▽投句料 一組につき千円(小為替又は現金書留)▽締切 令和7年4月15日(当日消印有効)▽送付先 〒169-8521 東京都新宿区百人町3-28-10 俳人協会「全国俳句大会」係(電話 03-3367-6621)

▽選者

伊藤伊那男 井上弘美 今井聖 上田日差し 大串章 小川軽舟 小澤實權未知子 角谷昌子 加古宗也 片山由美子 加藤かな文 古賀雪江 小島健 坂本宮尾 佐怒賀直美 しなだしん 白濱一羊 鈴木しげを 鈴木太郎 染谷秀雄 高田正子 谷口智行 徳田千鶴子 中坪達哉 中原道夫 仲村青彦 西村和子 西山睦 野中亮介 能村研三 日原傳藤田直子 藤本美和子 松尾隆信 松岡隆子 南うみを 三村純也 村上喜代子 森田純一郎 横澤放川 (五十音順)

▽大会

令和7年9月16日(火) 正午開場・午後1時開会(入場無料) 有楽町朝日ホール 東京都千代田区

有楽町2-5-1 有楽町マリオン11階(JR有楽町駅中央口または銀座口・地下鉄銀座駅C-4 出口・地下鉄有楽町駅D-7a、D-7b 出口)

▽賞

大会賞・秀逸賞・各選者の特選賞。

☆大会終了後応募者に入選作品集をお送りします。(お一人5冊まで)

☆応募作品の訂正・取消しには応じられません。

☆類句及び二重投句については、入選を取消することがあります。

☆入賞作品は、俳人協会ホームページに掲載します。

☆なお、大会当日、参会者より一句を募集し、特選・入選者に賞を呈します(投句締切、午後1時。未発表作品。投句料無料)。

主催 公益社団法人 俳人協会 後援 朝日新聞社

四季の畔道

前橋市に、最高気温三十度の予報が出された六月はじめの土曜日。見頃をむかえた躑躅を見ようと赤城山へ向かった。新坂平の駐車場に車を停め、観光案内所のテラスへ出る。細波のように寄せ来る春蟬の声に混じり軽やかなホトトギスの声。麓の集落を抜けてわずか三十分でこの別世界である。水榭の森を縁取るように咲く山つつじの朱色が鮮やかで、これだけでも世塵を逃れて来た甲斐があると言えもの。それに比べ、今まで何十年も見て

来た白樺牧場の蓮華つつじの、衰退ぶりはどうしたことだ。子連れの羊が草を食む姿に、観光客は喜んでいながら、牧一面を埋めつくす蓮華つつじを知る者には、なんとも寂しい景色である。見晴山の山つつじも、小沼湖畔の八塩つつじも、当たり年と思われるだけに、ぜひ、その原因を知りたいと思った。

ネットに白樺牧場の蓮華つつじに関する学者の見解が載っていた。牛の放牧を止めたため、その排泄物による施肥効果や生態系が崩れたのではないかと。

牧一面を朱橙色に染める蓮華つつじを、また見られる日は来るのだろうか。(Y)

こらむ・しだりお

「ミスタープロ野球」と呼ばれた長嶋茂雄さんが亡くなった。89歳。天覧試合のサヨナラ本塁打をはじめ、数々の名場面での活躍は多くの人の目に焼き付いている▼プロデビューは開幕戦。ルーキーがいきなり3番打者。4番は「打撃の神様」川上哲治だったから、期待の高さが分かる。その試合は国鉄スワローズの金田正一投手に4打席4三振だったものの、シーズンを通して暴れまくり、ホームラン王と打点王に輝いた。新人王はもちろんだが、首位打者も手中にすれば三冠王だった。それまで三冠王は1リーグ時代、しかも春と秋の2シーズン制だったときに1例あるのみ。新人の三冠王となれば前代未

聞だ▼長嶋の打率は2位だった。「若造に三冠王を取らせてなるものか」と打率トップを最後まで譲らなかったのは田宮謙次郎(阪神)である。投手として入団し、通算12勝を挙げたが、打者に転向し好守好打で鳴らした。投手時代も打撃を得意としており、大谷翔平よりずっと前から二刀流を実践していた▼田宮は翌年、大毎オリオンズ(大映スターズと毎日オリオンズの合併)に移籍。シーズン終了後に球団オーナーの永田雅一社長に挨拶に行った。永田は映画会社の大映社長でもあったため、これから売り出そうとしていた柴田吾郎という青年が来ていた。社長は「柴田。田宮さんみたいに活躍できるように名前をもらえ。田宮さんどうですか」。名優・田宮二郎誕生の瞬間だ▼田宮謙次郎は引退後、複数の球団でコーチを務め、晩年は地元茨城・下館に帰って市議会議員を1期務めた。元プロ野球選手だけでなくさまざまなスポーツで名を上げた人が選挙に出ることは珍しくない。地方の市議を務めるのは、純粋に地元に貢献しようという気持ちだったのだろう▼長嶋がプロ1年目に三冠王を手にしていたらどうなっただろうか。田宮の厚い壁に阻まれて2位に終わったことで、努力を怠らなくなったと言われている。長嶋と田宮が競い合ったのは昭和33年。当時は小学生で、長嶋を応援していただけだったが、今年は昭和一〇〇年。長い時間が流れたが、いろいろなことを教えてもらった。